

## 熊谷先生、ありがとうございました

高 明 均

私が本学に専任教員として採用される過程で、熊谷先生は割愛のため、当時私が勤めていたソウルにある国立国際教育振興院（現国立国際教育院）を訪問されました。韓国では「割愛」という制度は珍しく、私を含め周りの人々が戸惑っている中で先生をお迎えすることとなりました。先生は、課長、部長、院長に挨拶をされ、私が関西大学に赴任することを認めていただきたい旨を丁寧に要請されました。先生が帰られた後、同僚や上司たちからお祝いの言葉をかけていただき、本当に嬉しかったことを覚えています。

本学に着任する直前の春、先生の御自宅で三日間ほどお世話になったことがありました。当時、先生は4匹の猫を飼われていましたが、猫の遊び場としての庭があり、さらに猫が自由に出入りするための通路を、窓をくり抜いて作っておられました。引越する時はいつもマンションの一階にこだわるとおっしゃいました。先生は犬より猫の方が好きな理由は、飼い主に会った時の反応のちがいで、犬はしっぽを振って跳ね上がりますが、猫は喜びを抑えているかのように一度振り向いて、そしてまたもとに戻るところにあるとおっしゃいました。人間の付き合いも、猫のように何ものにも媚びることなく、さりげなく本音で行動するのが大事だとおっしゃいました。先生のその言葉をいつも胸に刻んでおります。

1999年4月、先生は本学初めての朝鮮語専攻教員として赴任されました。それ以来、先生の御努力によって本学の朝鮮語教育体系が整備され発展してきました。特に、クロス留学制度を導入してから本制度の目的や教育課程を十分に生かし、トリリンガルとして日本語、英語、朝鮮語の言語や文化を身につけて社会に出る学生が年々増えています。また、先生は大学院外国語教育学研究科開設以来、朝鮮語を研究対象言語とする大学院生を持続的に受け入れ、研究指導を行ってこられました。さらに、人権問題委員長をはじめ、国際交流センター主事など各種委員会のメンバーとしてもご活躍されました。

研究面では、植民地言語政策、南北朝鮮や中国少数民族の言語政策、言語接触などのテーマに携われ、多大な業績を積み重ねてこられました。先生は社会問題にも積極的に参与され、大阪府の有識者会議のメンバーとして、朝鮮学校に対する授業料無償化の妥当性を認定する提言書を大阪府知事に提出するなど、朝鮮語研究者の立場から在日朝鮮人教育に関する所見を明らかにされました。

先生は田中克彦氏（現在、一橋大学名誉教授）のもとで学ばれました。十数年前、田中克彦

氏がモンゴルや中央アジアでの調査研究を行われた際、熊谷先生をはじめ、田中先生のもとで研究された方々が全国から新潟に集まり、田中克彦氏を囲む集いが持たれました。空港のロビーでお会いした田中克彦氏に同行していたモンゴルの要人たちは、色とりどりの長いスカーフを私たちの首に一つ一つ巻きながらあいさつをされましたが、その姿はまるで厳粛な儀式ように感じられました。一緒に参加させていただいた私はとても新鮮な衝撃を受けました。一晩泊まりつつ、学問的課題、社会的問題、人生の楽しさについて会話を交わしながら有意義な時を過ごしました。新潟の万代橋のそばにあるカフェで、遅くまでワインを飲みながら先生方の談話は続いていました。指導教授を敬ってしたがう熊谷先生の姿は、未だに目に焼き付いて忘れられません。

先生は、韓国に対して特別な愛情を抱かれており、留学を含めて十数年間韓国で過ごされたこともあって韓国のさまざまな事情をよくご存じでいらっしゃいます。先生の御努力下、高麗大学（ソウル）や東亜大学（釜山）などと姉妹校協定を結ぶことができ、韓国との国際交流の出発点となりました。

ある時、熊谷先生はハバロフスクに向かわれる前に、まずソウルに立ち寄られたことがありました。当時、ソウルにいた私は先生を迎えるために空港で待っていました。すると意外なことに、先生は松葉づえをつきながら現れました。出発前夜に足を怪我されたとのことでしたが、関係者たちとの約束を守るためでした。自分の体よりも仕事や人との付き合いを優先される先生の行動に感動を受けました。

また、韓国の著名な作家馬光洙氏（当時、延世大学国文学科教授）の小説『楽しいサラ』の日本語訳を翻訳出版され、6万6千部という韓国の文学作品の翻訳としては空前の発行部数を記録しました。馬光洙氏は韓国における儒教倫理の問題点を批判した著作だと主張しましたが、出版直後「わいせつ」を理由に発禁・回収処分を受け、逮捕され実刑判決を受けたまぼろしの話作でした。このほか、先生は金容沃氏（当時、高麗大学哲学科教授）の『女とは何か』も翻訳出版されました。この本の原著は、金容沃氏が硬直化した韓国の政治風土を公然と批判した「良心宣言」を発表して韓国社会に衝撃を与え、抗議のために大学に辞表を提出した直後に出版されたものでした。

このように、翻訳活動を通じて、韓国社会が抱えている問題を告発する知識人を日本社会に紹介するなど、日韓の架け橋としての役割を遂行されてきました。こうした先生のさまざまな御研究や御活躍が韓国社会で高く評価され、顕著な業績を上げた朝鮮語研究者に授与される「東崇学術賞」を受賞されました。この賞は韓国の人文学系分野では最も権威があり、受賞された先生と一緒に勤務できたことが、私はいつも自慢であり、誇りに思っております。

私は、研究を含め、学生の教育、日本の生活など、いつも先生に助けいただきました。これからも困った時は随時連絡させていただきますので、よろしく願いいたします。職場の同僚、人生の先輩、学問的恩師として先生を尊敬しております。先生が成し遂げられたあらゆる土台

や功績に基づいて、引き続き本学の朝鮮語教育の発展のため最善を尽くすことを約束します。

熊谷先生、これからもお元気で過ごしてください。最近読んだ本で、将来のライフを豊かにする条件として、‘自分の健康、家族や周りの人々の幸福、経済的余裕’を挙げています。その中で私は、何よりも健康が最優先だと考えます。これからもご自愛され、健康にご留意ください。自転車に乗って千里山キャンパスを駆け回る先生のお姿を、また見せていただけることと期待しております。

熊谷先生、本当にありがとうございました。